

「二度と乾くことはない」
2009年6月14日
ヨハネ4章1～15節

ヨハネの福音書の4章でのイエスとサマリアの女との井戸での出会いは、私たちに関する悲しい事実と、イエスに対する素晴らしい真実を表しています。そして、そのイエスの素晴らしさこそが、私たちの悲しい現実に必要なのです。

ですから、イエスなしでは悲惨な自分の現実を見落とすことによって、聖書に書かれているイエスの素晴らしいみ技を見逃さないように気をつけてください。聖書に私たちについて書かれている悲惨な現実は、イエスの救いがいかに素晴らしいものであるかということをお私にわからせるためであるからです。この箇所はそのために書かれているのです。話の中心は人間ではなくて、イエスなのです。

イエス：いつでも目的があり、人間関係を大切にし、より優れたお方

この1節から15節のなかで得にフォーカスしておきたいイエスに関する真実は、
1) 恵みに満ちた目的を持っていて 2) 恵みに満ちた人間関係を大切に
3) 恵みにみちて満ちて優れたお方である、というこの3つである。なぜ「恵みに満ちた」という言葉を繰り返しているかということ、ヨハネの一章で学んだ重要な箇所を思い出してもらいたい。14節と16節「ことばは肉となられ、私たちの内に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。その栄光は「恵み」と真実に満ちた、御父からひとり子への栄光であった。そして「恵み」に重なる「恵み」を、満ちあふれるほどに私たちはいただいた。」この箇所こそ、ヨハネの福音書の「北極星」、夜空に輝く導きの星ともいえる箇所です。この福音書のどの箇所も、そして特に今日の箇所は、この「北極星」ともいえるこの箇所を指しているのです。

この光なしでは、私たちはまるで、結婚とその親密さを理解しようとする4歳児にようなものです。イエスが「女の人よ、わたしがあなたにいのちの水を与えましょう」と言ったときに「でも先生、あなたは汲むものも持っていません」と言った女性は誰をさしていますか？私たちの他ありません！

今日の数節から読み取れるGood News（よい知らせ）は、イエスは 1) 恵みに満ちた目的をもって 2) 恵みに満ちた人間関係を大事にして 3) 恵みに満ちて優れたお方であるということです。この3つなしではわたしたちは解けない問題をかかえているようなものです。

1) イエスは恵みに満ちた目的を持っておられる

ヨハネ3章34節と35節では「神が送られた方は神のことばを告げます。なぜならその方は（ここはあとでいれる）」息もとまるほどの素晴らしいことばですね。神がイエスを送られた。イエスは神のことばを話される。神はイエスに計りしれないほどの霊をお与えになる、今も昔もとこしえに。父はイエスを愛されたのです。持っているすべてのものをお与えになったのです。つまりイエスは、神に遣わされた、神に愛された、神のことばを話す、計り知れないほど霊に満たされた（それもとこしえに）、すべての権能をお持ちになる方なのです。ヨハネ3章は、このことを伝えて終わります。

4章では、イエスが南部のユダを出発して、北部のガリラヤに向かうところから始まります。でも、ヨハネの1節から4節の書き方は、ある種の疑問を呼び起こします。そして、3章の終わり方が4章の質問の答えを導く手がかりになります。

「さて、パリサイ人がイエスがヨハネよりも多くの弟子を作り洗礼を授けているということを知ると（実際にはイエスではなくイエスの弟子が洗礼を授けていたのだが）イエスはユダを去り、再びガリラヤに向かった。サマリアを通過しなければならなかった。」

ヨハネによると、イエスがユダを去ったのは、パリサイ人が何かを知っているということを知ったからだ、ということです。パリサイ人が、イエスがヨハネよりも多くの弟子を作った、ということを知ったと書いてありますね。どういことでしょうか？みなさんは理解できますか？さっぱりですよ？多くのことが想像されます。私も、本当の理由はわからないのですが、4つの可能性をあげてみます。そのどれもある程度正しいと思われるます。

1. 始めに3章の終わりで、イエスが神に愛され、霊に満たされ、すべての権能を持っていると書かれてありますね。これにより、イエスがユダを離れたのは「恐れ」からではないことがはっきりとわかります。イエスは「すべての権能」を持っていたのです。それはイエス自身のいのちも含みます。「誰もわたしからいのちを奪うことはできません。わたしは自分からそれを捧げるのです。」イエスがパリサイ人に対する「恐れ」からユダを離れたのでないとすると、「イエスの時ではなかった」ということが考えられます。パリサイ人との間に問題を起こすには少し早すぎたのかもしれませんが、イエスのときではなかったのです。ヨハネ7章30節、2章4節、8章20節には「それで彼らはイエスを逮捕しようと探していた。しかし、誰もこの方に手をかけなかった。なぜならこの方の時はまだ来ていなかったからである」と書いてあります。

イエスは自分の死がいつどのようにくるのか知っていました。パリサイ人にはその権限がありませんでした。イエスが持っていたからです。そして、この時はまだ「イエスの時」ではなかったのです。「わたしが死ぬ時はわたしが決める。パリサイ人ではない！」だから、イエスはユダを離れたのです。これが私の第一の推測です。イエスの時がまだきていなかったため、イエスはこの土地を離れまし

た。イエスはすべてのことにおいて、目的を持っています。脅かされてではなく、恐れでもなく、自分の意志と計画により、ユダを離れサマリアに向うのです。

2番目の推測です。イエスがユダを離れたのは、ひょっとしたら、パリサイ人がイエスの上昇中の人気をヨハネを攻撃することに用いようとしたからかもしれません。ヨハネはパリサイ人を、これ以上はないというくらいはずかしめたのですから。ヨハネは「すべての人に」悔い改めと洗礼をすすめたのです。ヨハネは「悔い改め」を必要としないと思っているパリサイ人に対して悔い改めをすすめただけでなく、彼らを「まむしのすえ」とまで呼んだのですから、パリサイ人にとってヨハネは目の上のたんこぶのようなものでした。パリサイ人がイエスを認めたわけではないですが、イエスを利用してヨハネの教えが間違っただけであるということの人々に信じさせようとしたのです。もちろん、イエスはそんなことはこれっぽっちも望んでいません。だから、そうさせないためにユダを離れました。というのが第二の推測です。

3番目は、パリサイ人はヨハネとイエスの両方の権能と人気を落とそうとしていたと、イエスが見抜いたとも考えられます。

私が考えつく、イエスがユダを離れた4番目の理由は、先の3つの理由につけ加えて、イエスは「サマリアを通過して」ガリラヤに行かなければならないような、神様からの計画を感じたのかもしれないから、です。4節の「サマリアを通過『しなければ (had to)』ならなかった』というは、地理的な理由からでしょうか？ガリラヤに行くには、サマリアを通過していかなければならなかったのでしょうか？答えはNOです。ヨルダン川沿いからも行けましたし、ちょっと遠回りですが、海沿いからでも行けました。ユダからガリラヤへは何通りでも行けるのです。多くのユダヤ人は、サマリアを通らずに行ったのです。どうしてですか？ユダヤ人はサマリア人を「汚れている (unclean)」とみなしたからです。ではなぜ、イエスはサマリアを通過しなければ (had to)ならなかったのでしょうか？

はっきりとはわかりませんが、私にはそこで「やらなければならないことがあった」と取れるのです。私がそれを言い切れる理由のひとつは、サマリアの井戸で会うことになる女性についてイエスが何もかも知っていたからです。この箇所は、イエスの地上での生き方のなかで、イエスの神性がはっきりわかる場所ですよね。イエスはこの女性の人生のすべてをご存知だったのです。

ここであげた4つの目的のどれが実際にイエスがユダから離れさせたのかと見極めるのは難しいですし、もしかしたら私にはわからない理由が他にあったのかも知れません。わかっているのは、イエスを動かしたのは「状況」ではないということです。イエスが状況をコントロールしているのであって、状況がイエスをコントロールしているのではないのです。イエスにはユダを離れる「目的」があったのです。サマリアを通ったのは地理的な理由ではないのです。そして、先に挙げた4つのどれも、恵みに満ちあふれた目的なのです。十字架の時を待つのも、

ヨハネのことを心配したのも、ヨハネとイエスの二人の間の関係を正しく保つのも、姦淫の女との出会いを逃すことがないようにするのも、どれも恵みに満ちあふれた行動なのです。

絶対的な権能を持つ救い主を受け入れていることに伴う素晴らしいことの一つは、いつでも目的が複数あるということなのです。そして、この方のどの目的も、この方を信頼するすべての人に恵み深いのです。覚えておいてください、この方を信頼する人にとって、この方の目的はいつでも、希望にあふれ、役に立ち、あなたの益になるのです。ユダを離れガリラヤに向かう4つの目的を挙げましたが、本当は、数千もあるのです。ここを理解してください。私たちの、絶対的な権能をもたれる神様が、私たちの為にそのいのちをお捨てになられました。この方はすべての権能をもっておられるのです。自分のいのちを捨てられるのも自分の権能によってです。誰にも頼らず自分の意志によって行動されます。そして、この方が一つのことをなさるとき、その裏で同時に数万のことをされているのです。わたしたちは、そのうち3つ気がつくかもしれません。もしかしたら、5つか、7つくらいわかるかもしれません。その気がついたひとつのことの裏に、数億もの目的があるかもしれないから、わたしたちは神様のなさることに対して批判しないように気をつけなければなりません。知らされている3つのことが十分でないように考えてはなりません。

全能の神がわたしたちの側にいるのです！この神は、この地上で行われているすべてのことをすべての詳細にいたるまで、とこしえにご存知なのです。

未来永劫に全知全能の神がいるということはどんなに素晴らしいことであるか考えてください。神は私のことをときに押し倒すことがあるかも知れません。そしてその背後にある多くの目的のうち、ひとつくらいは教えてくれるかも知れません。でもひょっとしたらひとつも知らされないかも知れないのです。もちろん、すでに聖書に書かれている6つの目的以外はですけれどね。まあ、それはそれだけで一回の説教になるので、またの機会に。。。 (笑)

それが、今日の観察のひとつです。イエスは恵みに満ちあふれた目的を持っていたので、ユダを離れ、サマリアを通してガリラヤに向かわれた、ということです。

2) イエスは恵みにみちた人間関係を大切にされる

イエスは人間関係をとても大切にされます。ここに出てくる二人の主な登場人物は、イエスと井戸で出会うサマリアの女ですね。イエスがこの女性をただ単なる通りすがりの人として扱っていないというのは明らかです。それは来週の説教でさらに明らかになります。イエスはこの女性に異常なまでのフォーカスを置きます。彼女を放っておかないのです。イエスが、彼女に5人の夫がいたことを知っています。そして、今一緒に住んでいるのは彼女の夫ではない、ということまでご存知です。それは来週の箇所を読めばわかることですが、イエスはすでに知っ

ているのです。そしてイエスは、彼女の「礼拝」についての考え方を探ろうとします。

23節を見てください。この女性とちょっとした討論の末にイエスが言われたことです。「まことの礼拝者は霊とまことをもって父を礼拝する。なぜなら、父は父を礼拝するそのような人々をお探しになっているからです。」一体イエスは、ここから彼女に何を言おうとしているのでしょうか。父は「父を礼拝する」「そのような人々」を探しているとは彼女にとってどんな意味があるのでしょうか？皆さんの中で、ここの出来事とルカ15章に登場する放蕩息子とを比べたことがありますか？おどろくくらいの類似点があるのですよ。ルカ15章のはじめには、イエスが酒税人や罪人と食事をしている場面が書かれていますね。姦淫の罪を犯しているこのサマリアの女性はまさにそのルカ15章の酒税人や罪人なのです。そして、その人たちと食事をしているように、ここではイエスはサマリアの女性と会話を始めるのです。ルカ15章では、それを見たパリサイ人や立法学者たちがイエスを攻め始めます。「なぜ、あなたがたの先生は罪人を食事をするのか」と弟子たちに聞きますね。そこでイエスは3つのたとえ話をされます。その3つ目が放蕩息子の例えです。この話はなにを例えていますか？父が息子たちを、『両方』の息子たちを探し求めている、つまり父なる神は姦淫の罪を犯している彼女（放蕩息子）からも、そしてパリサイ人たち（放蕩息子の兄）からも礼拝を求めているのです。このところから、イエスが恵みに満ちた方で人間関係をとても大切にされる方だとうことがわかります。イエスはサマリアと通る必要はなかったのです。井戸の傍らに立って水を求めなくてもよかったです。この女性と会話を始めなくてもすんだのです。

よくこの箇所が「伝道」のために使われますね。「ほら、みなさん、イエス様のようになろう。出て行って、他人と会話を始めよう！」というようです。私は決してそういうふうはこの箇所を用いないようにしたいのです。なぜなら、私たちはこの「女性」であって、「イエス」の立場にはいないのです。わたしたちこそイエスに来てもらう必要があるのです。そこのところを真に理解できたら、「伝道しましょう」なんていう説教をする必要はないのですよ。

9節を読むと、サマリア人とユダヤ人の関係の悪さがわかります。ここのところをしっかりと理解してください。「ユダヤ人のあなたが、サマリアの女に水を求めるとはいったいどういうことでしょうか？」と彼女は聞きますね。ユダヤ人はサマリア人とつきあいをしなかったから、と書いてあります。

ドン・カールソンという歴史家はここに関しての説明をしています。サマリアはもともと北イスラエル王国の首都でした。それがいつのまにかサマリアという一地域になってしまいます。いったい何が起こったのでしょうか？何がユダヤ人との対決を引き起こしたのでしょうか？紀元前722年にアッシリアが北王国の首都サマリアを占領します。イスラエル人を略奪したあと、外国人がこの土地に移り住

み、生き残っていたイスラエル人と結婚しました。そしてイスラエル人は移ってきた外国人が拝んでいた古代宗教に心を奪われてしまうのです。バビロン捕囚から解放された南王国のユダヤ人らが祖国に戻ってみると、サマリア人は政治的反逆者になり下っていただけではなく、民族的に混血になっていて、宗教的には受け入れ難い行い事までしていたのです。モーセ五書（創、出、レビ、民、申）だけを聖典として受け入れ、聖書の残りを否定するにまでなっていたのです。紀元前400年には、ユダヤ人に対抗して、ゲリジム山に神殿を建てました。

つまり、ユダヤ人とサマリア人の間には政治的、民族的、宗教的な厚い壁が立っていたのです。ユダヤ人はサマリア人を軽蔑していました。なぜならユダヤ人にとってサマリア人は、儀式的にはけがれていて、人種的には混血で、宗教的には異端だったからです。彼らとの付き合いは避けて当然だったのです。

6節から8節でイエスがなされたことをより深く理解してもらうために、50年前の私の故郷の話をしたいと思います。

ウォールグリーンとカレセスとウールワース（どれもアメリカの中規模な薬局屋）には、かならず2つの水飲み場がありました。そのそれぞれの水飲み場の上には看板が掲げてあって「白人用」と「有色人種用」と書かれてありました。水飲み場を共有したくないために上水道を別々に作らなければならないことほど、自分たちの品格を落とすような状況があるでしょうか？もし自分の子どもが「どうして二つ水飲み場があるの？」と聞いてきたら一体なんて答えますか？

サマリアのスカルという町には井戸は一つしかありませんでした。「有色人種用」すなわちサマリア人用です。イエスは昼の12時頃に井戸のかたわらに座っておられ、このサマリアの女性に水を求められます。

イエスがここでしたことをよく読みとってください。第一に、もう何回も言ったように、イエスはサマリアを通られました。第二に、弟子たちを食糧の買い出しに送ります。（おそらく「きよくない」サマリア人によってつくられた食事です。）これはおそらく一人になるためです。弟子全員を買い出しに行かせる必要なかったのですから。三番目に、無視することができないくらい目立つように井戸に座っていたのです。（直訳「井戸の上に座っていた」）そして第四番目に、宗教的に汚れて、不道徳で、異端者で、悪い評判のサマリア人に水を求められました。「この井戸から水を飲んでもいいですか？」との許可を求めたものではありません。彼女のもっていた桶の水を求めたのです。

「有色人種用」と書かれた水飲み場で黒人女性がペットボトルに水を入れていたとしましょう。そこで白人男性が店中に聞こえるように「すみません、そのボトルの水を飲ませていただけますか？」と言ったのです。

彼女は9節でこう答えます。「ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしないのですよ。」これは少し訳があいまいです。直訳すると「ユダヤ人はサマリア人と物を共有しないのです」と言っているのです。「あなたはこのバケツを使うことはできませんよ。そんなことは前代未聞です。」と言っているのです。

イエスはこの前代未聞の関係を作ろうとしているのです。神はこの女性が救われるのを求めています。この女性が天国に行くのを望まれているのです。なんとという恵みあふれる関係でしょうか。偶然なことは一つもありません。すべて計画されたのです。「神はこの世を裁くために御子をこの世に送ったのではありません。この世が御子を通して救われるためです。」（ヨハネ3章17節）

イエスは数世紀にわたって続いてきたご法度を破りました。サマリアで一人になり、井戸に座られ、黙っておられず、サマリアの女性に声をかけ、姦淫の女の桶から水を求めました。関係を大切にされる方なのです。私たちはこの方の栄光を見ました。御父のひとり子の、真実と恵みに満ちた栄光です。そしてこの豊かさあふれる恵みを、高慢で、欲張りで、批判的で、みだらで、貪欲で、世俗的で、怠け者で、臆病で、情の薄い私たちに下さったのです。私たちはみな、それを受けたのです。

あなたもひょっとしたら50年前に、二つの水飲み場を作っていたかもしれません。わたしはその罪を免れられません。もしくは先日のワシントンDCの事件のように、ホロコスト（ナチスによるユダヤ人大量虐殺）博物館でユダヤ人を撃ち殺してしまったかもしれません。反対に、ずっと狙われていたユダヤ人かもしれないし、一定の水飲み場からしか水が飲めない人種だったかもしれません。でも、どちらにしても、この瞬間、この箇所の中で、そしてこの教会のなかで、神様はあなたとの親密な関係を求めているのです。それも、とても恵み深い愛で。それがこの井戸での会話が意味するところなのです。神様は今あなたを腕を広げて待っているのです。今日あなたは音楽を聴きにここに来たのかもしれませんが、でもがっかりしないでください、神様があなたをここに呼んだのです。あなたを求めてやまない神様は、決してあきらめないお方です。決してあなたを待つことをあきらめないと私は祈ります。サマリアの女性を見捨てなかったイエスは、あなたをあきらめません。ここに関しては来週詳しくみましょう。

今のが第二の観察点です。まず第一にイエスは恵みにあふれた目的をお持ちであり、第二に恵み深い人間関係を大切にされる方です。さて、三番目の観察点は、イエスは恵み深く何にもまして優れた方です。

この時点でイエスはすでにユダヤ人とサマリア人の間のことや人種争いの問題のことなど、すでに解決してしまいました。自分自身の行いによって、その人種間の厚い壁を打ち破ってしまったからです。10節からは、イエスはもっと重要な話題——永遠のいのち——に移ります。

イエスは彼女に答えます。「あなたが神の賜物を知っていて、『水を下さい。』とあなたに言っているのが誰だかを知っていたら、あなたの方からそれを求めたでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたでしょう。」女の人よ、神があなたの目を開けて下さるように。あなたが話しているその方こそ、神の賜物を持っている神の子なのですから。あなたは永遠のいのちを得ることができるのです！」

11節を見て下さい。その女性は言います。「先生、あなたは汲むものを何も持ってないし、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手に入れるのですか？」この時点で彼女はまったくわかっていません。まるでニコデモのようですね。イエスが彼に言われました。「私には新しいいのち（生ける水）があるのです。」ニコデモは「私が入れるような女性の胎はどこですか？」といい、この女性は「あなたに私にくださる永遠の生ける水（新しいいのち）があるのですって？どこにバケツがあるのですか？」と聞きました。これは私たちの姿です。盲目の私たち。神のたったひとりの子の栄光を見ることが出来ないのです。ニコデモもサマリアの女も、私たちなのです。永遠のいのちが目の前にあるのに、バケツのことを気にしているのです。教会に来ながら、礼拝後に見るバスケットボールの試合のことを気にしているのは、サマリアの女と同じです。

ここらで、彼女は何か違うものを感じたのでしょうか。12節ではイエスにこう聞きます。「あなたは私たちの先祖ヤコブよりも優れているのですか？彼は私たちに井戸を与え、彼自身もそこから飲み、家畜にも飲ませました。」イエスはヤコブよりも優れているのですか？どう思いますか？どのようにそれを知ることができるでしょうか？イエスがヤコブよりも勝っているのは簡単にわかりますね。でもどうやってそれを知ることができるのでしょうか。イエスは彼女にこう答えます。

誰でもこの井戸から水を飲むものはまた乾きます。しかし、誰でもわたしが与える水を飲む人はもう二度と乾きません。わたしが与える水はその人のなかで永遠のいのちの水をわきあがらせる泉となるからです。（13節～14節）

「女の人よ、私はヤコブよりも優れている。わたしの賜物もヤコブのそれより優れている。わたしの井戸も、息子たちも娘たちもヤコブのものより勝っている。彼らは死ぬことがないからだ」。

イエスがここで語っている彼の水についての5つの点を逃さないようにしてください。

1. それは神様からのギフト（賜物）です。（10節）
2. それは生ける水です。（1節後半）
3. これを飲む者は二度と乾くことがない。つまり、心乾いて求めるものにはそれを満たす水がいつでもある。（14節）
4. この水は泉、すなわち水の井戸となる（14節）。それにより、その人はもう二度と乾くことがない。時々誤解されるように、一口の水

が十分なのではなく、真の一口が永遠に続く水の源になるからもう乾くことがない、ということである。もう二度と井戸を探す必要がない、もう二度とたばこ、お酒、インターネット、セックス、その他もろもろの今まであなたの心を一時的に潤してきたものに頼る必要がないのです。

5. この水は永遠のいのちを与える。(14節)

「女の人は。確かにわたしはヤコブよりも優れている。しかし、傲慢にではない。恵あふれるように優れているのである。私の優越が、あなたにとっての救いなのです。あなたが低められ、わたしが高められなければなりません。わたしがいのちの水を持っていて、あなたは乾きを持っているのです。あなたは生きるためにわたしが持っているものが必要なのです。あなたがそれを飲めば、あなたが私を一生涯満足できる宝物だと信じることができるなら、あなたは永遠に生きるのです。」

ところが、彼女はそれが理解できません。まだその良さを味わっていないからです。15節を見て下さい。この女性は言います。「先生、その水を下さい。そうすれば私は乾くことがなく、ここに水を汲みにこなくても済むからです。」つまりは「このバケツは重いし面倒くさいから、その水をください。」と言っているのです。ニコデモと同じではないですか。まだわかっていないのです。回心どころではないです。この女の人は霊的に死んでいるのです。彼女はイエスの恵みを「古い自分(回心前の自分)」の必要を満たすために使おうとしているのです。私たちもこの点を気をつけなければならないのです。バケツが重いからイエスを望むような思いではいけないのです。

この続きを知るには一週間待たないとなりません。彼女はどうやって変えられたのでしょうか。イエスはあきらめません。あなたは、来週まで待つて、イエスを知って、味わって、信じて受け入れることができるかもしれません。でも、ひょっとしたら、その一週間が与えられていないかもしれません。だから、この水を飲んでください。

「金のない者も、水を求めて出て来なさい。」イザヤ55章1節

翻訳：愛咲えみ